

# 神武東遷について

山下 浩

古事記や日本書紀によると、ヤマト王権は始めから奈良県の大和地方にいた勢力がそのまま全国に支配圏を広げていったのではなく、九州の日向から神倭伊波礼毘古命が葦原中国（日本全体）を治めるのに適した土地を求めて東へ向かい、奈良県の在り地勢力を倒して畝火の白橿原宮（畝傍山の東南の橿原の宮）で神武天皇として即位した、としている。

この神武東遷の話は詳しい内容は別として、そういう話があったということは広く一般に知られている。神武天皇は歴史上の人物としてではなく、日本神話の架空のヒーローの一人として日本人の常識となっている。

それでは、考古学者たちは神武東遷をどのようにとらえているのだろうか。

神武東遷があったとしたら、それは弥生時代後期、卑弥呼の時代に関係せざるを得ず、当時の庄内式土器の移動に関する研究から、近畿や吉備の人々の九州への移動は確認できるが、逆にこの時期（3世紀）の九州の土器が近畿および吉備に移動した例はなく、邪馬台国の時代の九州から近畿への集団移住は可能性が低い、と白石太一郎氏は神武東遷の可能性を否定し、近畿の勢力が全国に勢力を拡大したという邪馬台国畿内説を説いている。邪馬台国畿内説の人々はこうした考えから神武東遷には否定的である。

それでは邪馬台国九州説の人々の考えはどうだろうか。

神武東遷を史実とするかはともかく、記紀（古事記と日本書紀を略して「記紀」という）などの国内資料に基づく研究では、九州で成立した王朝（邪馬台国）が東遷して畿内に移動したという説が邪馬台国九州説を唱える人たちの中にはある。さらにこの東遷説には、この東遷を神武東遷や天孫降臨などの神話に結びつける説と、特に記紀神話とは関係ないとする説の両パターンがある。東遷した時期や形態についても多くの説がある。東遷説は白鳥庫吉、和辻哲郎が戦前では有名であるが、戦後は、歴史学および歴史教育の場から日本神話を資料として扱うことは戦前の軍国主義との関係から忌避された。しかしこの東遷説は戦後も主に東京大学を中心に支持され発展し続けた。（参考資料：ウィキペディア「邪馬台国九州説」）

このように、戦後は邪馬台国九州説の人々の中には、神武東遷とは無関係に邪馬台国の勢力が東遷した、と考える人がいるようだ。

それでは考古学資料や魏志倭人伝などの中国の史料から神武東遷を裏付けることは可能なのだろうか。神武東遷を直接証明する資料が全くないことは周知の事実である。日向、宇佐、筑紫の岡田宮、その他の経由地のどこにもそれを示す遺跡の発見はなく、取り付く島もない。ならば、状況証拠の積み上げから神武東遷があったのか、あったとしたらそれはどういうものだったのか、いや、そういう事実は完全否定されるのか、そういったことを多面的に検証してみたい。

## 神武東遷のあらすじ（前編）

神武東遷のあらすじを古事記から書いてみる。

神倭伊波礼毘古命は、兄の五瀬命とともに、日向の高千穂宮で、葦原中国を治めるにはどこへ行くのが適当か相談し、東へ行くことにした。彼らは、日向を出発し筑紫へ向かい、豊国の宇沙（現・宇佐市）に着くと、菟狭津彦命・宇沙都比売の二人が足一騰宮を作って彼らに食事を差し上げた。彼らはそこから移動して、筑紫国の岡田宮で1年過ごし、さらに阿岐国の多祁理宮で7年、吉備国の高島宮で8年過ごした。

日向⇒豊国（大分県）の宇佐⇒筑紫国（福岡県）の岡田宮⇒安芸国（広島県）の多禰理宮⇒吉備国（岡山県）の高島宮と進んでいるが、詳しいことは何も書いてない。何より日向を離れて異国へ進むための日向国内の行政基盤の確立、兵力が手薄になる日向が周辺国から侵されないための方策など、東遷の前に何をしたか、それをまずは検討すべきだろう。それについてヒントになる記事が日本書紀の第12代景行天皇の熊襲討伐の中にある。

景行天皇即位12年、日向国に入り行宮を設けた。これを高屋宮という。12月、襲国（宮崎県と鹿児島県の県境に位置していたと言われている）にいる熊襲梟帥を討った。翌年夏に熊襲平定は完了した。

即位17年、子湯島の丹裳小野で朝日を見てこの国を「日向」と名付けた。

即位18年、3月に筑紫国の巡幸に立出。夷守（宮崎県小林市）で諸縣君の泉媛の歓待を受けた。熊県（熊本県球磨郡）に進み、首長である熊津彦兄弟の兄を従わせ弟を誅殺した。葦北（同葦北郡）、火国（熊本県）、高来県（長崎県諫早市または佐賀県多久市）を経て玉杵名邑（熊本県玉名市）で津頼という土蜘蛛を誅殺。さらに阿蘇国（熊本県阿蘇郡）、御木（福岡県大牟田市）、的邑（福岡県浮羽郡）へと至った。道中では地名由来説話が多く残されている。

即位19年、9月に還御。

景行天皇は日向国に入り、宮崎県と鹿児島県の県境あたりから平定を始め、熊襲（おそらく島嶼部を除く鹿児島県全域）を平定し、統治機構の整備などに5年を費やし、南九州平定を開始した。

高屋宮⇒夷守（宮崎県小林市）⇒熊県（熊本県球磨郡）⇒葦北（同葦北郡）⇒火国（熊本県）⇒高来県（長崎県諫早市または佐賀県多久市）⇒玉杵名邑（熊本県玉名市）⇒阿蘇国（熊本県阿蘇郡）⇒御木（福岡県大牟田市、福岡県南部に位置する）⇒的邑（福岡県浮羽郡、同じく福岡県南部に位置する）と、現在の県名で、熊本から長崎または佐賀の南部、熊本の阿蘇地方、福岡県南部と平定した。

この景行天皇の熊襲平定は、おそらく、神武東遷前の南九州平定を景行天皇の事績として追記したものであろう。古事記の景行天皇の事績には熊襲平定の記事はなく、日本武尊の記事がメインとなっていることから、日本書紀の編者は古事記の構成に合わせて日本武尊の記事に並行して神武天皇の東遷前の熊襲平定の事績を挿入したのではなかろうか。それでないか、神武東遷後、南九州は熊襲や土蜘蛛の跋扈する未開の地へと変わり果てていたことになり、現地の行政官がどのような政治を行っていたのか、責任者がまず処断されなければならない重大事件となったことだろう。

それでは神武東遷の行程にもどる。

イワレビコは豊国の宇沙で菟狭津彦を従え、筑紫国の岡田宮（福岡県北九州市八幡西区）へ移った。

弥生時代の北部九州は、早くから水稲稲作技術の伝来、大陸との交易などで栄えていた。西暦57年、現在の福岡市や春日市など福岡平野一帯を支配していたとみられる奴国は後漢に朝貢し、「漢委奴國王」と刻された金印を下賜されていた。遺跡群も多く発掘されており、後漢に朝貢した奴国王よりも何代か前の王の墓と思われる須玖岡本遺跡では銅剣2、銅矛4、銅戈1、銅鏡（前漢鏡）32面以上、ガラス璧（瑠璃璧）2個片以上、ガラス管玉が見つかっている。後漢への朝貢当時は、奴国はおそらく北部九州に広く勢力を伸ばし、後漢からも倭国における重要な属国とみられていたのだろう。

奴国の西には伊都国があった。

伊都国は現在の福岡県糸島市の一部と福岡市西区の一部（旧怡土郡）にあったとされ、奴国と同様に多くの副産品を含む遺跡が発掘されており、弥生時代中期の三雲南小路遺跡、井原鑿溝遺跡、弥生時代後期から終末期の平原遺跡などがある。

奴国は後漢への朝貢のあと急激に衰退していく。後漢から下賜された金印は王墓の副葬品として発見されたのではなく、玄界灘に浮かぶ、当時は島だった志賀島で江戸時代の天明年間に農民により畑から掘り出された。奴国の須玖岡本遺跡のあとは豪華な副葬品を伴う王墓の発見はなく、卑弥呼の時代（三世紀）、魏志倭人伝では「奴国の長官を兕馬觚しまこといい、副官は卑奴母離ひなもりという。二万余戸がある。」と記すのみで伊都国の「伊都国の長官を爾支にきといい、副官は泄謨觚せもこ・柄渠觚へくこという。千余戸の家がある。代々王がおり、みな女王国に属す。帯方郡たいほうぐんの使者の往来では滞在する所。」の記事とは大きな隔たりが見られる。

考えられることは西暦 57 年、奴国が後漢に朝貢した後、奴国が亡びたということである。後漢書には「安帝の永初元年（西暦 107 年）、倭国王帥升すいしょう等が生口 160 人を献じ、謁見を請うた」とあり、この 50 年の間に奴国が亡びたと考えられる。

奴国を亡ぼしたのはどこか。

第一に考えられるのは、奴国の西隣に位置する伊都国である。

当時の奴国と伊都国の力関係を決定づけるものはないが、その後の両国の情勢の変化を見ると伊都国が奴国を圧倒しており、伊都国が奴国を亡ぼしたと考えることができる。しかし気になるのは魏志倭人伝の伊都国の記事に「代々王がおり、みな女王国に属す」と書かれていることである。伊都国は女王国、すなわち卑弥呼の属国なのである。そして属国として女王国と帯方郡の使者の往来では滞在するところ、という重要な責務を担っている。

伊都国が女王国の属国であるということは、奴国を亡ぼした主役は、伊都国よりも強力な別の国に他ならない。そう考えると神武東遷の記事に行きつくことになる。

イワレビコは福岡県北九州市八幡西区にあったと思われる岡田宮に移った、と書かれている。その西には奴国の領域がある。さらにその西に伊都国がある。伊都国領内、あるいはその南あたりに景行天皇の熊襲征討に書かれている「御木（福岡県大牟田市）、的邑いくほのむら（福岡県浮羽郡）」があり、どこかの時点で伊都国とイワレビコとの間でなんらかの交渉が持たれたことが推認できる。ここで領土の安定、軍事協力などの約束が結ばれていたとしたら、東からイワレビコが、西から伊都国が奴国を攻めることができ、南九州はイワレビコの領域だから残された奴国軍の敗走路は北の玄界灘しかない。こうして奴国の金印は玄界灘の志賀島に埋納されることになった。伊都国王はこの戦の戦功により領地の安堵を獲得し、イワレビコの東遷を後方から支援することになったのだろう。

なお、西暦 107 年後漢に朝貢した帥升すいしょうはイワレビコなのか伊都国王なのかわからない。

イワレビコは岡田宮で 1 年過ごし、再び東遷へと旅立った。古事記では次に安芸国の多祁理宮たけりのみやで 7 年過ごしたとあるが、九州と安芸国の間には山口県南部の周防国がある。周防国については景行天皇の熊襲征討の中に次のような記事がある。

（九州に入る前）、即位 12 年 9 月、周防国の娑麼さぼ（山口県防府市）に着くと神夏磯媛かむなつそひめという女曾が投降してきた。神夏磯媛は宇佐の川上にたむろする鼻垂はなたり、御木の川上にある耳垂みみたり、高羽の川上にある麻剥あさはぎ、緑野の川上にいる土折つちおり猪折いおりという賊に抵抗の意思があるので征伐するよう上奏した。この 4 人がいるのは要害の地である。そこでまず麻剥に赤い服や禪、様々な珍しいものを与え、他の三人も呼びよせたところをまとめて誅殺した。

周防国では、抵抗勢力が川上の要害の地にこもり、イワレビコの軍を苦しめたであろうと読み取ることができる。このころ、弥生時代中期、山口県の瀬戸内沿岸部に多くの高地性集落が築かれた。宇部市、周南市、周防大島の丸山遺跡などである。また、内陸部でも山口市に亀山遺跡などが築かれている。こうした高地性集落にこもって抗戦し

たことが言い伝えられ、景行天皇の事績として書かれたのだろう。(参考資料：日本の古代遺跡 30 山口 小野忠熙著 保育社)

周防国の次は安芸国である。多祁理宮<sup>たけりのみや</sup>で7年過ごしたとあるが、ここには賊や女曾などの記事がない。おそらく、在地勢力は対外情勢の厳しさから抵抗ではなく、服従を選んだのではなかろうか。

安芸国の東には今の兵庫県西部から岡山県を中心に広島県東部までを支配する吉備国があった。そして北には山陰を広く支配する出雲の勢力があった。安芸国は常に吉備や出雲の圧力にさらされながらそのバランスの上で存続してきたが、西の周防国が九州からの侵略に亡びていくのを見せられたに違いない。イワレビコは安芸国に侵入するまでに吉備には危害を加えないこと、友好関係を続けたいことなどを伝え、安芸国の侵奪を黙認させたのではなかろうか。安芸国では7年過ごしたとあるが、おそらくそれ以上だろう。イワレビコの次の戦争は「倭国乱」だから。

古事記では次に「吉備国の高島宮で8年過ごした」と書かれており、イワレビコはおそらく安芸を離れて吉備の都に館を構えたのだろう。伊都国を属国とする強大な力を持つ王でありながら、その都も、一族の王墓も西日本のどこにも見当たらないので、倭国の中心地から遠く、不便な九州や安芸から離れて、吉備国の都で、大和を中心とする周囲の強国との外交に努めていたのではなかろうか。足利氏が本貫の地を離れ、京の室町に幕府を開いたように。この時期、倭国内の鉄の保有量を地域別に見てみると、鉄の産地である朝鮮半島南部の伽耶地域との交易の窓口だった北部九州がダントツに多く、熊本、長崎の九州西部に次いで吉備が九州東部と同程度となっており、伽耶地域と直接交易していた山陰の出雲や北近畿よりも多く、イワレビコが吉備に滞在していたのではないかという仮説の傍証となろう。(鉄の保有量の参考資料：卑弥呼とヤマト王権 寺沢薫著 中公選書)

### 「倭国乱」について

倭国乱とは後漢書に見られる和国内の争乱で「桓帝・靈帝の治世の間(146年 - 189年)、倭国大いに乱れ、さらに互いに攻め合い、(桓帝から靈帝に交代した168年を挟んで)数年間倭国は主なき状態となった。」と書かれている。帥升<sup>すいしょう</sup>が後漢に朝貢しようとした西暦107年からは約60年後のことである。60年もたてば、イワレビコから2代くらい世代交代したはずで、神武東遷のはなしに齟齬が生じてきたようだ。このことはとりあえずペンディングして、倭国乱の原因について検討してみたい。

弥生期の社会は、地域ごと、時期ごとにその形態が大きく異なる点に特徴があった。マツリや葬送儀礼、墓制などにも差異があった。そして社会階層の分化に伴い、階層による新たな変化が生じていった。墓制についてみると大きく三つの段階に分けられる。第一段階は集団墓・共同墓地であり、第二段階は集団墓の中に不均等が出てくるといふ段階であり、第三の段階は集団内の特定の人物あるいは特定のグループの墓地あるいは墓域が区画されるという段階である。この変化はそれぞれの社会の状況によるものであり、段階の移行が同時にあらわれることも起きる。

倭国乱が起こる二世紀後半にあたる弥生時代後期後半、倭国各地にマツリや葬送儀礼に大きなうねりが生じた。

伊都国を中心とする北部九州では、武器形祭器の銅矛、銅戈が巨大化しつつも従来のマツリは続いた。また、伊都国の平原一号墓は小さいながら、40面の鏡を副葬するなど、北部九州に以前からある豊かな副葬品を伴う王墓の伝統を引き継いでいる。

大和を中心とした近畿では、近畿式銅鐸が大型化し、広まった。

東海西部では、三遠式銅鐸が近畿同様、大型化し広まった。

出雲を中心とする山陰では、出雲型銅剣と銅鐸をマツリの祭器としていたが、それを廃して四隅突出型方形墓という糸巻き形の王族墓の造営へと大きく変化した。

瀬戸内中部・東部の四国の瀬戸内諸国、播磨、吉備の諸国は、平形銅剣と銅鐸のマツリを廃して王族墓の造営へと移った。

タニハと呼ばれる北近畿では、銅鐸のマツリを廃して大型墳丘墓へと移行した。

北陸のコシ（越）では、銅鐸のマツリを廃して四隅突出型方形墓へ移行した。（参考資料：卑弥呼とヤマト王権 寺沢薫著 中公選書）

出雲の四隅突出型方形墓は北近畿では見られないものの北陸のコシにも広がり、吉備の特殊器台を出雲の墳丘上に設置するなど、三つの地域の宗教的、政治的繋がりの強さが見える。このことは、倭国の勢力図に大きな影響を与えた。つまり、出雲、吉備、四国北部、コシ、その他の王族墓を政治・宗教の柱に導入した勢力と、従来の銅鐸などの青銅器をマツリの祭器としている近畿、東海西部、北部九州などの勢力である。このうち北部九州はイワレビコ  
の支配下にあり、王墓を造営できる王が伊都国王のみだったことと、豊かな副葬品を伴う王墓の伝統が残っていたことから除外される。

ここから見えるのは、出雲、吉備を中心とする西部勢力と、近畿、東海の東部勢力との分断だ。

東部勢力が祭器として崇めている銅鐸を西部勢力は廃しており、祭礼で不和、不協和音が顕在化する場面があってもおかしくない。近畿と吉備、出雲などとの東西の境界での政治的衝突、軍事的いざこざが次第に修復不能な状態になり、ついには「倭国乱」へと突入したのではなかろうか。

## 神武東遷のあらすじ（後編）

再び神武東遷の後半に戻ろう。

浪速国の白肩津（東大阪市付近）に停泊すると、登美的那賀須泥毘古の軍勢が待ち構えていた。その軍勢との戦いの中で、兄の五瀬命はナガスネヒコが放った矢に当たってしまった。

五瀬命は「我々は日の神の御子だから、日に向かって（東を向いて）戦うのは良くない。廻り込んで日を背にして（西を向いて）戦おう」と言った。それで南の方へ回り込んだが、五瀬命は紀国の男之水門（大阪府泉南市）に着いた所で亡くなった。

イワレビコが熊野まで来た時、大熊が現われてすぐに消えた。するとイワレビコを始め彼が率いていた兵士たちは皆気を失ってしまった。この時、熊野の高倉下が、一振りの大刀を持って来ると、イワレビコはすぐに目が覚めた。高倉下からイワレビコがその大刀を受け取ると、熊野の荒ぶる神は自然に切り倒されてしまい、兵士たちは意識を回復した。

八咫鳥の案内で、熊野から吉野の川辺を経て、さらに険しい道を行き大和の宇陀に至った。宇陀には兄宇迦斯・弟宇迦斯の兄弟がいた。まず八咫鳥を遣わして、イワレビコに仕えるか尋ねさせたが、兄の兄宇迦斯は鳴鏑を射て追い返してしまった。弟の弟宇迦斯はイワレビコに付いたが、兄宇迦斯は自分が仕掛けた罠にかかって死んだ。

忍坂（桜井市）の地では、土雲の八十建が待ち構えていた。そこでイワレビコは八十建に御馳走を与え、それぞれに刀を隠し持った調理人をつけた。そして合図とともに一斉に打ち殺した。

その後、登美毘古（ナガスネビコ）と戦った。最後に兄師木・弟師木の兄弟と戦い、そこに邇藝速日命が参上し、天津神の御子としての印の品物を差し上げて仕えた。

こうして荒ぶる神たちや多くの土雲を服従させ、神倭伊波礼毘古命は畝火の白橿原宮で神武天皇として即位した。

戦いのルートは大阪⇒熊野⇒大和の宇陀⇒桜井市と進んでいるが、一筋縄ではいかない、困難な行軍だった筋書きになっている。これは、倭国乱が数年にわたる戦乱であったこととシンクロしている。

白肩津（東大阪市付近）で開戦し、ナガスネヒコに敗れ、紀伊半島を南下するのだが、当時の大阪の社会を見ると、高槻市の大規模な環濠集落、安満遺跡は、弥生時代前期から続いたが後期に環濠が埋もれ、少数の竪穴住居が残るだけになった。その同時期、安満を背後から見下ろす北側の尾根上にたくさんの住居を大きな環濠が取り囲む古曾部・芝谷遺跡が現れる。このほか、枚方市、和泉市、柏原市、寝屋川市など、多くの場所で高地性集落が築かれている。（参考資料：列島創世記一 日本の歴史 旧石器・弥生・古墳時代 松永武彦著、および、日本の古代遺跡 11 大阪中部 瀬川芳則 中尾芳治著 保育社）

紀伊半島を南下した和歌山県では、弥生時代から江戸時代までの集落が営まれていた太田黒田遺跡があるが、遺跡の特徴として、弥生後期の遺構、遺物だけがなぜか欠落していて、この時期、人々がこぞって集落を離れざるを得ない重大事件が発生した可能性が窺える。高地性集落については、紀ノ川河口部にみられる。（参考資料：日本の古代遺跡 46 和歌山 大野嶺夫 藤井保夫著 保育社）

神武東遷の最終地、奈良県を見てみよう。

弥生時代中期、奈良盆地中央部にあった大規模な環濠集落に、唐古・鍵遺跡がある。遺跡面積は約三十万平方メートル。規模の大きさのみならず、大型建物の跡地や青銅器鑄造炉など工房の跡地が発見され、話題となった。全国から糸魚川産ヒスイや土器などが集まる一方、銅鐸の主要な製造地でもあったと見られ、弥生時代の日本列島内でも重要な物流の拠点だったのではないかと見られている。この地が大和の都であり、かつ銅鐸文化圏の中心地だったので、河内、近江、紀伊など近畿のみならず、中部地方、中国地方東部など各地の搬入土器が出土している。

唐古・鍵遺跡は弥生時代前期に出現し、中期に最盛期を迎えたが、後期になると遺跡からの出土物が減少していき、人口も減少したと考えられる。古墳時代後期まで小規模な集落として遺跡は継続していくが、六世紀になると遺跡内に小型前方後円墳が築かれ、しだいに廃れていった。（参考資料：唐古・鍵遺跡が語る邪馬台国 西川寿勝著 洋泉社）

弥生時代後期末での集落の衰退は、なにも唐古・鍵遺跡に限ったことではない。大和において知られている坪井・大福遺跡など 14 の拠点集落の多くは、やはりこの段階で消滅なり衰退しているのである。こうした拠点集落の衰退とやらはらに、東部の山麓や三輪山麓の集落が充実していき、纏向遺跡や大型前方後円墳が出現する。（参考資料：日本の古代遺跡 5 奈良中部 寺沢薫 千賀久著 保育社）

奈良県の遺跡の状況から見えることは、弥生時代と古墳時代の断絶である。弥生時代の遺跡は古墳時代に継承されず、中心的集落であった唐古・鍵遺跡は廃れ、まったく新しい都、纏向遺跡が築かれた。政治的に異なる勢力によって旧来の集落が衰えていき、新参の勢力によって新しい国づくりが行われたのだ。今、奈良県を歩いて見える多くの古墳や古くからの神社仏閣は古墳時代以降のもので、古墳時代の遺跡に弥生時代から継承されたものはほとんどない。大和は被征服地だった。

倭国乱の時期、戦乱となった近畿以外の地域はどのような影響を受けたのだろうか。

まずイワレビコの領地である周防、安芸を見てみよう。

周防では弥生時代中期、瀬戸内沿岸部に多くの高地性集落が築かれたが、宇部市、周南市などの中期の遺跡あとに再び高地性集落が築かれ、下松市など多くの場所にも新たに築かれた。安芸では広島湾沿岸各地に新たに高地性集落が築かれた。（参考資料：日本の古代遺跡 30 山口 小野忠熙著 保育社ほか）

高地性集落はそのほか九州中央部、京都・滋賀、東海地方と広範囲に作られており、乱の影響の広がりが窺われる。

淡路島には、それまで近畿地方に見られなかった鉄器の生産工房が築造された。淡路市黒谷の海拔 150 メートルにある高地性集落の五斗長垣内遺跡である。ここでは鉄鍬が作られたが、倭国乱後の三世紀には生産が終わった。（参考資料：ウィキペディア「五斗長垣内遺跡」）

「倭国乱」は銅鐸をマツリの祭器とする勢力と、そうしたマツリを廃した勢力の弥生時代の宗教戦争だった。西部勢力の大国、吉備、出雲は、東部勢力との間に播磨、タニハ（近畿北部）を挟んでいるため直接衝突することはないと思われる。西部勢力の主力は、倭国中央部への野心、「神武東遷」の志に燃えるイワレビコの軍に必然的になった。イワレビコには安芸国以西の広い領地があり、兵站に余裕があった。先に見たように、兵站を担う安芸、周防、九州の中央部では新たに高地性集落ができ、新たな負担に強い抵抗も生じたようだ。戦いは数年に及び、吉備、出雲も参戦し、倭国は「暦年無主」の状態になった。

倭国乱は西部勢力の勝利で終わった。

宗教祭器の銅鐸は、東海地方の三遠式が二世紀末で、近畿式が三世紀に姿を完全に消した。乱が終息した二世紀末から、西部勢力は奈良県桜井市の三輪山の北西麓に新しい都の建設を始めた。纏向遺跡である。

纏向遺跡の範囲は、北は烏田川、南は五味原川、東は山辺の道に接する巻野内地区、西は東田地区の範囲で、その面積は3㎞<sup>2</sup>に達する。遺跡地図上ではおよそ楕円形の平面形状となっている。(参考資料：卑弥呼とヤマト王権 寺沢薫著 中公選書)

寺沢薫は、纏向遺跡の特徴と特異性を次のように挙げている。

1. 3世紀初めに突然現れた集落で、規模も大きい。
2. 搬入土器が多く、その搬出地は、瀬戸内海沿岸部、山陰、近畿各地、北陸、伊勢湾岸沿岸部、わずかだが北九州や南海道、東海道、南関東と、全国にまたがっている。遺跡規模は大規模で市的機能を持っていた。
3. 生活用具が少なく土木具が目立ち、巨大な運河等の土木工事が行われている。
4. 導水施設と祭祀施設は王権祭祀、王権関連建物。吉備の王墓に起源する弧帯文、特殊器台・壺などが発掘されている。
5. 居住空間縁辺に定型化した箸墓古墳、および纏向型前方後円墳がある。
6. 平安時代初期の「大市」墨書土器があり、この地が『倭名類聚抄』記載の「於保以智」郷に相当するとみられ、『日本書紀』記載の海柘榴市も纏向遺跡南に比定されていることから、纏向が後世に至るまで市的機能を有していたとみられる。

寺沢はこのように述べた後、「このような考古学的・文献学的特徴をトータルに備えた巨大な集落は、三世紀の日本列島には他に存在しない。とすれば、三世紀の纏向遺跡こそが、『ヤマト王権』と呼ばれる列島最初の王権の都が置かれた都市であった可能性がきわめて高いといえる」と結論付けている。

わたしもこの意見に賛同する。記紀の「神武東遷」はイワレビコ一代で日向から大和までを平定し、西日本の統一を成し遂げた成功ストーリーであるが、実際は西暦100年代初めから二世紀終わりまで、およそ7～80年を要した長期にわたる歴史絵巻だった。「倭国乱」には近畿以西の諸国が関係し、宗教では銅鐸などの祭器を祀る祭礼が完全に姿を消し、代わって、為政者の力を誇示する前方後円墳を頂点とする古墳が全国に、最終的に16万基も築造される、いわゆる「古墳時代」が始まるのである。

西暦57年の奴国の後漢への朝貢、107年の帥升の後漢書の記事、桓帝・靈帝の治世の間(146年 - 189年)の倭国乱の記事のあと、倭国は中国の史料から姿を消してしまう。西暦107年までは、倭国の中心が北部九州だったのに、その後、三世紀に記された魏志倭人伝では大和の邪馬台国が倭国の都となり、西暦107年からの約130年間は歴史の空白期間となっている。この空白は考古学の資料の解読と、信憑性に大いに疑義があるものの我が国の正史である古事記、日本書紀をもとに解き明かさなければならない。記紀については戦前の軍国主義教育に利用された黒歴史から、史料とはみなさない風潮があるが、無視する必要はない。客観的に読み解けばその裏にある歴史の事実が見えてこよう。歴史の空白期間について今後より一層研究が進むことを期待する。